

(特集投稿論文) レトリックの語用論 [研究論文]

## 記事談話冒頭における多重左方転位構文の 修辭的効果について

山内 昇  
大同大学

This study concerns multiple left dislocation (MLD) wherein more than two elements are enumerated in the left peripheral position. When it appears discourse-initially, the left dislocation construction is observed to be infelicitous. However, MLD can be found in discourse-initial contexts, such as opening statements of newspapers and magazines. This study accounts for this peculiarity from rhetorical points of view and argues that MLD can effectively be used at the beginning of discourses to hold the reader's attention in a state of suspense.

キーワード： 多重左方転位、左方転位、修辭的効果、記事談話冒頭、サスペンス

### 1. はじめに

左方転位 (left dislocation; 以後 LD と略記)<sup>1</sup> とは、(1) に示すように、ある語句が文頭に生起し、後続節にその語句を同一指示する代名詞等が使用される構文である。<sup>2</sup>

---

\* 本稿の執筆に際し、大名力先生、3名の匿名査読委員の方々、滝浦真人編集委員長から貴重なご指摘とご助言を賜りました。この場を借りて、心より感謝の意を申し上げます。なお、本稿の不備や誤りは、全て筆者の責任によります。

<sup>1</sup> 本研究では、構文の名称として「左方転位」という用語を使用する。この用語は生成統語論の枠組みの中で、Ross (1967: 422) により、移動操作の名称として使用されたものである。(1) のような構造に対する「転位 (dislocation)」という用語の使用は、生成統語論で使用されるよりも前から存在しており、筆者が知る限り Bally (1909: 311) が初出である。したがって、この用語の使用が即座に統語的な移動操作の仮定につながるわけではない。

<sup>2</sup> 簡潔化のため「・・・を同一指示する代名詞等が使用される」という一般的な LD の定義を述べたが、Lambrecht (2001) によれば、次の (i) のように、後続節に文頭の語句を同一指示する代名詞等が生起するという条件は、満たされない場合がある。

(i) That's not the typical family anymore. The typical family today, the husband and the wife both work. (Lambrecht 2001: 1059)

(i) における the typical family today と the husband the wife には、同一指示的ではない意味関係が成立している。MLD においても、次の (ii) に示すように、文頭の語句と後続節内の名詞句との

- (1) Her parents, they seem pretty uncaring.

(Huddleston and Pullum 2002: 1409)

LDに関する従来の研究では、LDにより談話を開始することはできないと指摘されている(Hankamer 1974: 221 参照)。しかし、広範囲のデータを観察すると、その使用はより複雑である。次の(2)に示すように、複数個の語句が文頭に列挙されるタイプのLDは、新聞・雑誌における記事の本文一文目といった、先行文脈を伴わない環境に使用される場合がある。

- (2) Twitching, trembling, panic, disorientation, hallucinations, terror, depression, mania and psychotic breakdown—these are some of the reported effects of meditation. Surprised? We were too. (Miguel Farias and Catherine Wikholm. “Ommm... aargh!” *New Scientist*, 16 May 2015, pp. 28–29)

本研究では、便宜的に(1)と(2)のようなタイプのLDをそれぞれ「一重左方転位」(Single Left Dislocation; 以後SLDと略記)と「多重左方転位」(Multiple Left Dislocation; 以後MLDと略記)と呼ぶことにする。<sup>3</sup> また、新聞・雑誌における記事の本文を「記事談話」と呼び、その一文目を「記事談話冒頭」と呼ぶことにする。

本研究は、MLDが記事談話冒頭に使用される理由を、構文としての機能的特徴から考察し、次のように主張する。MLDには、文頭に複数個の語句を列挙することにより、読み手に何らかの範疇名を考えさせた上で、後続節に書き手が意図した範疇名が明かされるという機能的特徴がある。先行文脈を伴わない環境に使用されると、文頭の列挙と後続節における意図の明示がサスペンスの発生と解消の働きを担う。それにより、読み手の関心が以降の内容に引きつけられるという修辭的効果が発生するため、記事談話冒頭という環境に効果的に使用される。

本論文の構成は以下の通りである。第2節では、SLDの機能に関する先行研究を概観

---

間に、同一指示以外の意味関係が成立する場合がある。

- (ii) Manipulative, dishonest and lacking empathy—the traits that describe a psychopath aren't particularly pleasant. (Jessica Hamzelou. “Psychopaths aren't so clever after all.” *New Scientist*, 28 Jan. 2017, p. 12)

(ii)では、文頭の3つの語句と後続節におけるthe traits that describe a psychopathとの間に、上位下位の関係が成立している。本研究は、(ii)のような事例もMLDに含めて議論を進める。

<sup>3</sup> 本研究がSLDとMLDと呼ぶ事例は、伝統文法では「重化主語(Verdopplung des Subjektes)」(Mätzner 1864: 16–26)および「主語の繰り返し(repetition of subject)」(Poutsma 1904: 127–129)と呼ばれてきた。名称からも分かるように、これらの研究では、主語位置に文頭の語句を同一指示する代名詞等が使用された事例のみが考察対象とされている。本研究が扱うMLDの事例には、主語位置に代名詞類が使用されないものもあるため、これらの用語は採用しない。

する。第3節では、MLDの使用場面を指摘し、冒頭場面の使用には、従来の機能を適用できないことを示す。第4節では、MLDが特徴的に使用される記事談話には、その書き出しにサスペンスを発生させる文体がたびたび使用される性質があることを述べる。第5節では、MLDの機能的特徴を指摘し、記事談話冒頭における修辭的効果を考察する。第6節では、全体のまとめを述べる。

## 2. 先行研究の概観

英語におけるMLDの事例は、古くはMätzner (1864) と Poutsma (1904) により取り上げられているが、その使用場面や機能に関しては、現在までほとんど記述が進められていない。そのため、本節では、SLDを対象に行われたLDの機能に関する先行研究を概観し、既存の機能に基づくと、LDは先行文脈を伴わない環境に使用される用法を持たないと予測されることを示す。なお、LDの機能に関する研究には、単一の機能を仮定する立場と、複数個の機能を仮定する立場とがある。以下では、どちらの立場における機能が記述的に妥当なのかという議論には立ち入らず、二つの立場を分けて概観する。

### 2.1. 単一の機能を仮定する研究

前者の立場を取る研究の先駆けとして、Rodman (1974) と Gundel (1974) が挙げられる。まず、Rodman (1974: 440) によれば、LDは新しい話題を談話に確立させる操作であるため、既に確立された話題をLDによって取り立てると容認不可になる。例えば、(3)の疑問文に対する応答(a)のように、先行発話に提示されたJohnをLDにより話題として取り立てることはできないが、(b)のように、新しい話題としてBillを取り立てると、容認可能になる。

- (3) What can you tell me about John?  
 a. \*John, Mary kissed him.  
 b. Nothing. But Bill, Mary kissed him.

(Rodman 1974: 440)

一方、Gundel (1974: 74-78) によれば、LDは、文頭の語句と後続節がそれぞれ話題と評言として機能する構文であり、先行談話に明示的・非明示的に存在するWhat about X?に対する応答として使用される。例えば、次の(4)に示すLDは、What about {this room/women/the new Kubrick movie}? という疑問文に対する応答として用いられる。

- (4) a. This room, it really depresses me.  
 b. Women, I'll never be able to figure them out.

- c. The new Kubrick movie, Bill said Marvin told him it was great.

(Gundel 1974: 66)

Rodman (1974) と Gundel (1974) による主張は、文頭の語句が話題として機能するという点では一致しているが、その話題が談話において新情報を表すのか旧情報を表すのかという点では相違がある。<sup>4</sup> この不一致は、次の Keenan and Scheffelin (1976) の主張を踏まえると解消される。

Keenan and Scheffelin (1976: 243-246) によれば、LD は、聞き手が同定可能な指示対象を聞き手の意識に前景化する機能を持ち、①新情報となる指示対象を導入する場合 ((5) 参照)、②背景化された指示対象を再導入する場合 ((6) 参照)、③前景化されている指示対象を強調する場合 ((7) 参照) に使用される (下線は筆者による)。<sup>5</sup>

- (5) (Adolescents discussing how parents treat them.)

K: Yeah// Yeah! No matter how old// you are.

L: Yeah. Mh hm.

L: Parents don't understand. But all grownups w-they do it to kids. Whether they're your own or not.

(Keenan and Schieffelin 1976: 243)

- (6) K: An' I got a red sweater, an' a white one, an' a blue one, an' yellow one, an' a couple other sweaters, you know. And uh my sister loves borrowing my sweaters because they're pullovers, you know, an' she c'n wear a blouse under 'em an' she thinks "Well this is great." (pause)

K: An' so my red sweater, I haven't seen it since I got it.

(ibid.)

<sup>4</sup> Kantor (1976) によれば、LD における文頭の語句には、新情報を表すものと旧情報を表すものがある。例えば、次の (a) における John は新情報を表しているが、(b) における gin は旧情報を表している。

- (i) a. Who did what for Mary?  
John, when he went to Boston, he took her out to dinner.  
b. How do you feel about gin?  
Gin, whenever it's offered, I'll always drink it.

(Kantor 1976: 169)

<sup>5</sup> Keenan and Scheffelin (1976) には、用例中の記号類に関する説明が記されていない。同研究に使用された事例は、Harvey Sacks により収集され、Gail Jefferson により転写された Five Group of Therapy Sessions というデータベースから取られたものである。同データベースが使用された Jefferson (2004: 24-31) によれば、斜線 2 本 (//) は聞き手の発話との重なりを表しており、ダッシュ (-) は語句の発話が中断されていることを表している。

## (7) (discussing younger siblings)

L: Y'know some of 'em are damn tall and goodlooking they could pass for (t)-nineteen.// A twelve year old guy comes over I say who's y-older brother is he? He's not he's in the A7.

R: But they don't-

R: But they don't have a brain to go with it hehhh.

L: These kids I don't believe it they're six foot.

(ibid.: 245-246)

Rodman (1974) による (3b) と Gundel (1974) による (4) における LD は、どちらも聞き手の意識に文頭の名詞句の指示対象を前景化する機能を担っており、(3b) における LD は新情報となる指示対象を導入する場合であり、(4) における LD は前景化されている指示対象を強調する場合であると考えられる。

以上の3つの研究における主張は、Okuno (1992) により、次の (8) のようにまとめられている (下線は筆者による)。

- (8) LD has one basic function, which is to introduce a new topic into the consciousness of the hearer. The new topic thus introduced must have some relation to the preceding discourse. (Okuno 1992: 6)

要するに、LD は先行談話と何らかの関わりを持つ新しい話題を導入するという単一の機能を持つということである。加えて、Okuno (1992: 6) によれば、(8) における下線部の条件づけは、LD が談話開始時に使用できないという事実を説明する際に一定の役割を果たす。それ以上の詳細は述べられていないが、煎じ詰めれば、LD の形式を取るからには、文頭の語句が先行文脈と関係づけられるはずであるが、談話の開始時には、肝心の先行文脈が存在しないため、LD の使用は容認されないということである。したがって、(8) のような単一の機能を仮定する限り、LD は先行文脈を伴わない環境に使用されないと予測される。

## 2.2. 複数の機能を仮定する研究

次に、複数の機能を仮定する立場を取る代表的な研究として、Prince (1997) を概観する。Prince (1997) は、(9) に挙げる3種類の機能により、LD の使用を説明している。なお、Prince (1997) は、話し言葉だけではなく、書き言葉からの事例も取り上げている。

- (9) a. Simplify Discourse Processing: Simplifying LDs  
 b. Trigger a Poset Inference: Poset LDs  
 c. Amnesty an Island-Violation: Resumptive Pronoun LDs

(Prince 1997)

第一に、Simplifying LDs とは、新しい情報を談話に導入する際に、旧情報を表す語句の生起が好まれる位置を避け、文頭の位置を使用することにより、談話処理上の負荷を軽減するという機能である。次の (10) では、新情報を表す the landlady を談話に導入する際に、新情報の生起が好まれない主語位置を避け、敢えて、統語的にさらに上位の位置が使用されている。<sup>6</sup>

- (10) My sister got stabbed. She died. Two of my sisters were living together on 18th street. They had gone to bed, and this man, their girlfriend's husband, came in. He started fussing with my sister and she started to scream. The landlady, she went up, and he laid her out. So sister went to get a wash cloth to put on her ... (*Welcomat*, 12/2/81, p. 15) (ibid.: 122)

Prince (1997) は、主語位置の他に、新情報の導入が好まれない位置として、所有格の位置を挙げている。一方、目的語の位置は、新情報を表す語句が生起しても、談話処理上の負荷がかからないと述べている。なお、Simplifying LDs は、進行中の談話に新しい情報を導入する機能であるという点に注意されたい。

第二に、Poset LDs とは、文頭に生起した語句が、先行談話から想起された事柄と半順序集合 (partially ordered set) の関係を結ぶことを聞き手に推測させる機能である。次の (11) では、LD の形式を取ることにより、文頭の語句 one と another が three groups of mice と半順序集合の関係にあることを読み手に推測させている。

- (11) She had an idea for a project. She's going to use three groups of mice. One, she'll feed them mouse chow, just the regular stuff they make for mice. Another, she'll feed them veggies. And the third she'll feed junk food. (SH, 11/7/81) (ibid.: 125)

Prince (1997) が援用している「半順序集合」という概念は、Hirschberg (1985) により、言語形式と尺度含意の関係を捉えるために使用された集合論の概念である。簡潔に定義するならば「要素間に包含関係が成立する集合」である。<sup>7</sup> その具体例として、is-a-part-of

<sup>6</sup> 仮に LD における文頭の語句が話題を表すのであれば、As for テストや Speaking of テストといった文の話題を判別するためのテストに通過するはずである。しかし、(10) における the landlady は、{as for/speaking of} the landlady にすると容認性が低下するため、話題を表していない可能性が高い (Prince 1998: 284 参照)。したがって、2.1. 節で概観した話題という概念を使用した主張には、(10) のような例の存在が問題となる。

<sup>7</sup> Prince (1997: 126) および Prince (1998: 289) では、より正確な定義が述べられている。それによれば、半順序集合とは、集合  $e$  に元  $e-1$ 、 $e-2$ 、 $e-3$  が内包されるとき、それらの間に、反射的 (reflexive)、非対称的 (antisymmetric)、かつ推移的 (transitive) な関係が成立する場合の集合であ



の関係（例：楽曲と CD アルバムの関係）や is-a-subtype-of の関係（例：シャム猫とネコの関係）などが挙げられる。したがって、「半順序集合の関係にあることを読み手に推測させる」とは、(11) を例に取れば、one と another が three groups of mice と is-a-part-of という関係にあることを読み手に推測させるということである。

第三に、Resumptive Pronoun LDs とは、話題化 (topicalization) が文法的に不可能な位置から抜き出しを行う際に、その位置に代名詞を置き形式的に LD にすることで、抜き出しを可能にするという機能である。次の (12b) のように、間接疑問節から my copy of Anttila を話題化することは文法的に不可であるが、(12a) のように元の位置に it を置けば可能になる。

- (12) a. GC: You bought Anttila?  
 EP: No, this is Alice Freed's copy.  
 GC: My copy of Anttila I don't know who has [it].  
 b.\*?My copy of Anttila I don't know who has [e].

(ibid.: 134)

Prince (1997) は、(12a) の LD が Poset LDs として認められる可能性を示唆しながらも、Resumptive Pronoun LDs という別の機能を提案している。<sup>8</sup> その理由として、抜き出しが島制約に違反する場合に、空所の位置に代名詞を置くことにより、その違反を免れるという統語的な現象の存在が挙げられている。つまり、(12a) における LD の使用には、話題化を使用したいが、統語的な制約から LD の形式を取らざるをえないという、Poset LDs とは別の動機づけが働いているため、独立した機能として規定するということである。

以上のように、Prince (1997) は、場面ごとの使用動機に基づき、複数個の機能を設定している。仮に上述の 3 種類の機能を LD が持つ機能の網羅的なりすとであるとするならば、LD は先行文脈を伴わない環境に使用されないと予測される。

### 2.3. まとめ

本節では、SLD を対象に行われた LD の機能に関する研究を概観した。単一の機能を仮定する立場と複数の機能を仮定する立場のどちらの主張に基づいても、LD は先行文脈

り、または、非反射的 (irreflexive)、対称的 (asymmetric)、かつ推移的 (transitive) な関係が成立する場合の集合である。

<sup>8</sup> (12a) の my copy of Anttila が先行発話から想定される copies of Anttila という集合と半順序集合の関係を結ぶためと考えられる。

を伴わない環境に使用されないという予測が導かれることが分かる。SLD を基に提案された機能が、LD 全般に適用可能なものであるとするならば、MLD に対しても、同様の予測が立てられることになる。次節では、MLD の使用場面を記述し、上述の機能によって、各場面に使用される理由を捉えられるかどうかを考察する。

### 3. MLD の使用場面

一般に、LD は、話し言葉に散見され、書き言葉には、ほとんどみられないとされている (Biber et al. 1999: 957 参照)。しかし、MLD は、新聞や雑誌の記事といった、むしろ書き言葉に広く使用される。Keenan (1974) における「無計画な談話 (unplanned discourse)」と「計画的な談話 (planned discourse)」の分類に従うと、MLD は後者に特徴的な構文である。<sup>9</sup> 本節では、特定の新聞および雑誌から収集した事例を分類し、MLD は、少なくとも、①例示の場面、②総括の場面、③冒頭の場面に使用されることを指摘する。<sup>10</sup> 加えて、①と②の場面における MLD には、前節で概観した LD の機能を適用可能であるが、③冒頭場面における MLD には適用できないことを示す。

第一に、次の (13) に示すように、文頭の語句が先行談話中に提示された語句の具体例となる場合がある。(13) は、航空宇宙産業に携わる米国企業 TRW 社が NASA (米航空宇宙局) からの要請で開発した観測機に関する記事の一部である (下線は筆者による)。

- (13) Since radio astronomy began, only a few decades ago, some brand new words have been added to the dictionary. Pulsar, quasar, black hole ... these are only the most talked about objects and there are more questions about them than answers. (Unknown Author. "Conversation Pieces: Probing the High Energy Universe." *New Scientist*, 4 Dec. 1975, p. 565)

<sup>9</sup> 次の (i) に、Keenan (1974) による「無計画な談話」と「計画的な談話」の定義を示す。

- (i) a. Unplanned discourse is discourse that lacks forethought and organizational preparation.  
b. Planned discourse is discourse that has been thought out and organized (designed) prior to its expression.

(Keenan 1974: 6)

両者の相違は、発話に先立ち、その内容・語彙・構造などが練られているかどうかにある。なお、無計画な書き言葉や計画的な話し言葉も想定されるため、書き言葉と話し言葉の分類を言い換えたものではない。

<sup>10</sup> The Daily Yomiuri, The Japan News, The New York Times, National Geographic, New Scientist などに掲載された記事から、MLD の事例を 124 例収集した。特定の用法のみを収集していた時期があるため、各用法の頻度は明記しないが、半数以上は冒頭場面に使用された事例である。



(13) における pulsar, quasar, black hole は、先行文脈に提示された some brand new words の具体例と考えられる。したがって、pulsar 等は、先行文脈中の語句に関連付けられた新しい話題といえる。また、個々の語句と some brand new words には is-a-member-of の関係が成立するため、(13) の MLD は Poset LDs の一種であると考えられる。

第二に、次の (14) に示すように、先行文脈に展開された内容を要約的に繰り返す場面に、MLD が使用されることがある。(14) は、作家 James Purdy の著作 Gertrude of Stony Island Avenue の紹介記事の一部である（下線は筆者による）。

- (14) Always uneasy with Gertrude's flamboyant carnality, the specifics of which she never wished to know, Carrie now finds herself reflecting that her daughter at least lived, while she has not lived at all. (Carrie, by the way, was also the name of a libidinous Windy City painter in Purdy's 1964 novel, "Cabot Wright Begins.") Fearing that she failed her daughter and chagrined that they never loved each other—"though this," she says, "was the one thing both of us wanted"—Carrie becomes obsessed with learning as much as she can about Gertrude's life, which was mostly a mystery to her. Over the objections of her husband, Vic, and despite her own delicate constitution (she is constantly taking smelling salts), Carrie determines that she has found her "life's purpose in dead vanished Gertrude."

Love, death, family, emotional estrangement—these are among Purdy's major themes, and few writers have written less sentimentally about any of them. (Bruce Bawer. "The Sensuous Woman." *The New York Times*, 30 Aug. 1998)

文頭に列挙された love, death, family, emotional estrangement は、前段落で述べられた、Carrie と家族との関係およびそこに伴う感情経験を要約的に表した語句である。したがって、(14) の MLD における文頭の語句は、先行談話に関連付けられた新しい話題といえる。また、個々の語句は、先行談話における特定の語句との包含関係を推測させるものではないため、厳密には Poset LDs の一種と見なすことはできないが、先行文脈との関係性を喚起させるという点では、Poset LDs の機能に近いと考えられる。

第三に、上述の (2) に示したように、MLD は記事談話の冒頭場面に使用される場合がある。(2) の事例では、直前に記事の見出しがあるため、文頭の語句は見出しの内容と関係づけられた新しい話題と見なせる可能性がある。しかし、見出しに目を通さなかった場合に、一文目の MLD が容認不可になるわけではない。したがって、(2) におけるような MLD の機能を、単に先行文脈に関係する新しい話題の提示として済ませることはできない。また、文頭の語句が新情報の導入になっているという点を踏まえると、Simplifying

LDs の一種と見なせる可能性がある。しかし、Simplifying LDs は、上述の通り、進行中の談話に新情報を導入する際に、新情報の導入が好まれない位置を避け、文頭の位置を使用するという機能である。したがって、直前に進行中の談話を伴わない (2) を Simplifying LDs として見なすことはできない。さらに、次の (15) に至っては、後続節内に文頭の語句を同一指示する代名詞類が使用されていないため、特定の位置の代わりに文頭の位置を使用したとは考えられない。(15) は、寝不足の副作用に関する記事の冒頭一文目である。

- (15) Dark puffy eyes, a feeling of deep exhaustion, and a foul mood to match—all of us have experienced the side effects of a lack of sleep. But exactly why sleep is so important for our well-being remains a mystery. (Jessica Hamzelou. “No neutral gear for the sleep-deprived.” *New Scientist*, 3 Oct. 2015, p. 14)

(15) のように、代名詞類の使用は義務的ではないという点も考慮すると、なおさら、冒頭における MLD を Simplifying LDs の機能により捉えることは困難である。

以上、本節では、MLD が ①例示の場面、②総括の場面、③冒頭の場面で使用されることを指摘し、なかでも、③冒頭の場面における使用は、前節で概観した LD の機能からは予測できないことを述べた。仮に MLD を LD の一種として位置づける場合、単一の機能を仮定する立場を取るならば、SLD と MLD の両方を包括的に捉えられるように LD の機能を修正する必要がある。しかし、MLD が冒頭に使用されるという事実は、SLD が冒頭に使用されないという事実と相反するため、そのような修正は困難である。一方で、複数の機能を仮定する立場を取るならば、MLD の場合にのみ、冒頭場面に使用されるという機能を仮定すれば事実には合う。しかし、文頭における語句の個数の増減が機能の相違に影響する理由を示すことは困難であり、単なる偶然として扱われる可能性がある。そこで、本研究は、近年 Iwasaki (2015: 165-172) により提案された「文法は、各言語において唯一的なものではなく、ジャンルに応じて異なる複数の下位文法の集合体である」という視点を踏まえ、MLD を書き言葉および計画的な談話という特定のジャンルに特有の修辭的技巧として位置づけることにする。それにより、SLD と MLD で使用場面および機能が異なるという事実は、ジャンルに応じて文法が異なるためと説明される。次節では、MLD が特徴的に使用される記事談話の性質を概観する。

#### 4. 記事談話の性質

本研究における「記事談話」(新聞・雑誌の記事本文) は、書き言葉および計画的な談話の下位ジャンルとして位置づけられる。しかし、同様のジャンルに位置づけられる法律文

章や学術文章といった媒体とは異なり、記事談話では、書き出しから、読み手にサスペンスの状態を発生させる文体がたびたび使用される。

具体例を示す前に「サスペンス」という用語の定義を確認する。「サスペンス」とは、小説や映画などに使用される修辭的技巧の一つであり、佐藤・佐々木・松尾 (2006: 409) では「当の文において最も肝要な言葉の発語を遅らせ、末尾に置くことによって、聞き手の期待を高め、発語されたときの驚きや強い感銘の効果を狙うあや」と定義されている。言語研究においても、ある言語現象の使用に関して「サスペンスに引き込む働きがある」と指摘される場合があるが、サスペンスの発生と解消が一文の中で行われるとは限らないため、上述の定義を厳密に適用することはできない。そのため、本研究では、便宜上の操作的定義として「ある表現の意味解釈が保留された場合に、読み手/聞き手に生じる心理状態」と仮定する。<sup>11</sup> 以下では、サスペンスの発生を説明するために、MLD 以外の記事談話冒頭に使用された事例を取り上げる。

記事談話冒頭において、読み手をサスペンスの状態に引き込む方策には、少なくとも 2 種類がある。第一の方策は、先行詞を伴わない代名詞類により記事談話を開始することである ((16) 参照; 下線は筆者による)。

- (16) It represents London as much as the red double-decker bus does, or Big Ben's clock tower, but the traditional black cab is to come under further threat from over-seas raiders. (Robert Lea and Sandy Chapman. "Nissan vans to give London's iconic black cabs a run for their money." *The Daily Yomiuri*, 12 Aug. 2012, p. 9)

(16) における *it* の指示対象は、後方の *but* 節の主語位置 (*the traditional black cab*) に提示される。読み手は *it* の解釈を一旦保留にし、以降の内容を読み進めことになり、その間、サスペンスの状態に置かれることになる。仮に *The traditional black cab ... it ...* という語順を取るならば、サスペンスを生じさせる働きは消失する。

第二の方策は、読み手の百科事典的知識からは指示対象を同定できないと想定される情報を述べることにより、記事談話を開始することである ((17) 参照; 下線は筆者による)。

<sup>11</sup> Uchida (1998) は、Sperber and Wilson (1986/1995) により提唱された関連性理論の枠組みに基づき、サスペンスという心理状態に関して、次の (i) のように述べている。

(i) the readers are left in a state of 'suspense' throughout the time in which they cannot identify or specify the 'deviant' relationships in the text. (Uchida 1998: 164)

(i) によれば、サスペンスとは、テキスト中に描写された関係性を同定したり特定したりできないときに、読み手が置かれる心理状態ということである。関連性理論では、一般に「修辭的」と呼ばれる現象が通常の言語表現として分析される。本研究では、関連性理論と同様の立場を取るわけではないため、(i) の定義は採用しない。

- (17) There's a killer inside every mouse. Researchers have found the brain region that controls hunting, and have triggered it using lasers. (Unknown Author. "Laser activates killer instinct in mice." *New Scientist*, 21 Jan. 2017, p. 19)

(17) の一文目では「全てのネズミの中には殺し屋がいる」と述べられている。多くの読み手にとって「ネズミの中に殺し屋がいる」という情報は、百科事典的知識に組み込まれていないものである。そのため、それが一体何であるのかの解釈は一時保留されることになり、その間、読み手はサスペンスの状態に置かれる。サスペンスの状態は、二文目でそれが実は「ネズミの狩猟本能を司る脳の部位」であることが明かされることにより解消される。

比較対象として、次の(18)に、読み手をサスペンスの状態に引き込む働きを持たない事例を挙げる(下線は筆者による)。

- (18) Stephen Hawking says that the human species has 100 years to populate another planet to ensure its survival. His claim, on BBC science TV show *Tomorrow's World*, has sparked controversy. (Dirk Schulze-Makuch. "Time to start packing." *New Scientist*, 20 May 2017, p. 22)

(18) の場合、主語位置の Stephen Hawking は、記事談話に新規に導入された名詞句であるが、少なくとも *New Scientist* という雑誌の読者層では、誰もが知っている人物であるため、想定される読み手にとって、その指示対象の理解は容易である。したがって、(18) には、読み手にサスペンスの状態を発生させる素地はない。

上述の(16)と(17)のような事例を踏まえると、記事談話という環境には、書き出しから、読み手にサスペンスの状態を発生させる文体がたびたび使用されるという性質があることが分かる。<sup>12</sup> 次節では、記事談話冒頭という環境で MLD がどのような修辭的効果を持つのかを構文としての機能的特徴から考察する。

## 5. MLD の機能的特徴と記事談話冒頭における修辭的効果

本節では、MLD を構成する特徴的な部分として、①文頭における語句の列挙、②文頭の列挙に対する後続節の働き、③コンマよりも長い区切りを表す句読点の使用という3点を取り上げ、各部分の機能が組み合わさることにより生じる MLD 固有の機能的特徴を

<sup>12</sup> より綿密な考察を進めるには、記事談話に限らず、冒頭という環境において、読み手と聞き手の認知状態がどのような経緯をたどるのかに関するモデルを提示し、その中で MLD がどのような働きをするのかを分析する必要がある。

明らかにする。さらに、記事談話冒頭という環境に使用されることにより発生する修辭的効果を考察する。

### 5.1. 文頭における語句の列挙

MLDに見られる顕著な特徴は文頭における語句の列挙である。Fahnestock (2011: 241)によれば、語句の列挙は、読み手に何らかの範疇を想起させる働きを持つ。例えば、Do you want a hot dog, a ham sandwich, a slice of pizza, a hamburger, or a turkey wrap? という文における目的語位置の列挙は、米国における大部分の読み手に「昼食に食べるもの」という範疇名を想起させる。このような指摘を踏まえると、MLDにおける語句の列挙にも同様に、それらが何の列挙であるのかを読み手に想起させる機能があると考えられる。<sup>13</sup> 先行文脈を伴わない冒頭では、列挙された語句の共通属性などから、意図された範疇名を推測することになる。そのため、書き手により意図された範疇名が何であるのかに関して、様々な可能性が想定される。例えば、上記(2)の場合、「痙攣・震え・発狂・方向感覚の喪失・幻覚・恐れ・憂鬱・躁鬱・精神衰弱」という列挙からは「精神障害の症状」や「脳機能障害による症状」などの範疇名が想起される。また、(15)における「浮腫んだ目・疲労感・不機嫌」からは「睡眠不足の症状」や「失恋後の症状」や「花粉症の症状」などが想起される。どちらの場合も、文頭の列挙を読み込んだ時点では、書き手がどの範疇名を意図しているのかは不明であるため、読み手は文頭の語句の解釈を保留にするか、または、仮の解釈のまま、後続節を読み進めることになる。このように、記事談話冒頭という環境では、列挙から想起される範疇名の可能性が広がるため、文頭の列挙は読み手にサスペンスの状態を発生させる働きを持つと考えられる。

### 5.2. 文頭の列挙に対する後続節の働き

第二の特徴は、文頭の列挙に対する後続節の働きである。列挙後の後続節には、文頭における語句の列挙により、書き手が意図していた範疇名が明示される。範疇名が判明した時点で、列挙から発生したサスペンスは解消され、以降の内容に関心を引きつける効果が生まれる。例えば、上述の(2)の場合、後続節まで読み進めると、文頭の列挙が「瞑想の副作用」を意図したものであることが明かされる。この範疇名を文頭の列挙だけから推測することは困難であるため、読み手の予測から飛躍した範疇名が明かされたことになる。それにより、読み手の関心を二文目以降の内容に引き付けるという効果が得られる。また、(15)の場合には、文頭の語句が「睡眠不足の症状」のリストであることが明かされ

<sup>13</sup> 言い換えれば、文頭に列挙された語句の意味解釈には、個々の語句の指示対象の理解に加え、範疇化 (categorization) という認知過程を利用した推論操作が働くということである。範疇化に関しては、Rosch (1978) および Barsalou (1983) などを参照されたい。



る。(2) に比べると (15) の列挙は分かりやすく、読み手によっては、文頭における列挙の時点でも「睡眠不足の症状」という範疇名を推測可能かもしれない。<sup>14</sup> 読み手の納得のゆく範疇名を明かすことによっても、以降の内容に関心を引き付ける効果があると思われる。

### 5.3. 句読点の多様性とポーズの有無

第三の特徴は、文頭の語句と後続節の間に、コンマよりも長い区切りを表す句読点が使用されるという点である。一般に SLD を文字表記する場合には、文頭の語句と後続節との間にコンマが使用される。Huddleston and Pullum (2002: 1745) によれば、LD におけるコンマの使用は義務的である。一見すると、このコンマは、音韻的なポーズを表しているように思えるかもしれない。しかし、Lambrecht (2001: 1050) によると、LD におけるコンマの使用は、正書法上の慣習に過ぎず、音韻的なポーズを表すわけではないという。それに対して、MLD に使用される句読点はコンマに限定されていない。上述の (2) などでは、ダッシュが使用されており、(13) では、三点リーダーが使用されている。その他にも、コロン、セミコロン、ピリオドが使用される場合がある ((19) (20) (21) 参照)。

- (19) Beachfront dining, fresh lobster, and a European clientele: Somalia's restaurant scene is quickly changing for the better. (Unknown Author. "Visitors To 'Failed State' Somalia Can Now Eat Lobster At This Luxury Beachfront Restaurant." *The Daily Yomiuri*, 9 June 2012, p. 12)
- (20) The stamp of jackboots, raps on the door, marches and uniforms; these are what we associate with the emergence of an authoritarian state. (Unknown Author. "Protest? Yes, we can: We mustn't let a superpower turn its back on rationality." *New Scientist*, 21 Jan. 2017, p. 5)
- (21) Bank fraud, virus attacks, hacked email accounts. There were 5.8 million cybercrime incidents in England and Wales last year, affecting about one in 10 people, says the UK's Office for National Statistics. (Unknown Author. "One Per Cent: Cybercrime on the rise." *New Scientist*, 30 July 2016, p. 24)

<sup>14</sup> (15) の場合、いくつかの範疇名を推測した読み手には、サスペンスの状態が発生すると考えられるが、「睡眠不足の症状」という範疇名を唯一的に推測できた読み手には、サスペンスの状態が発生していない可能性がある。後者の場合、文頭の列挙は、読み手に「謎かけ (riddle)」をする働きを持つと考えられるかもしれない。今後の研究の方向性として、サスペンスを冒頭場面における MLD に基本的な働きとして認めた上で、その他の場面における MLD にも共通する働きとして「謎かけ」を仮定するといった、二段構えの分析が考えられる。謎かけに関しては、Dienhart (1998) などを参照されたい。



文頭の語句の個数が増えると、コンマよりも大きい区切りを表す句読点の使用が許されるという事実は、単なる正書法上の慣習として片付けることはできない。文頭の列挙の直後に、それらが何を列挙したものなのかを考えさせるための思考のポーズが置かれているとすれば、ダッシュやピリオドなどのコンマよりも大きい区切りを表す句読点が使用されるという事実を捉えることが可能になる。<sup>15</sup> 記事談話冒頭という環境では、思考ためのポーズが置かれることにより、読み手は一瞬ながらもサスペンスの状態に据え置かれることになる。<sup>16</sup>

#### 5.4. まとめ

以上の分析をまとめると、MLD は (22) のような機能的特徴を持つため、記事談話冒頭に効果的に使用され、(23) のような修辭的效果を果たす。<sup>17</sup>

##### (22) MLD の機能的特徴：

文頭の列挙は、読み手に何らかの範疇名を想起させる働きがある。直後に思考のためのポーズが置かれ、後続節に書き手が意図した範疇名が明かされる。

##### (23) 記事談話冒頭における MLD の修辭的效果：

記事談話冒頭では、文頭の列挙により書き手が意図した範疇名が何であるかに関して、様々な可能性が想定されるため、読み手にサスペンスの状態が発生する。直後に思考のためのポーズが置かれることにより、読み手は一瞬ながらもサスペンスの状態に据え置かれる。サスペンスの状態は、後続節において範疇名が明かされることにより解消され、以降の内容に関心が引きつけられるという修辭的效果が生じる。

<sup>15</sup> この点に関しては、さらなる考察が必要である。SLD と MLD の音声データを音声分析ソフトで解析し、実際のポーズの有無や長さを比較するなどの方法が考えられる。

<sup>16</sup> 思考のためのポーズは、サスペンス状態の維持だけではなく、後続節まで読み進めれば、それが解消されることの告知として働いている可能性がある。

<sup>17</sup> 次の (i) のような事例を SLD として扱うならば、少なくとも書き言葉においては、SLD も記事談話冒頭で使用可能ということになる。(i) は、乳幼児の指紋採取技術に関する記事の冒頭一文目である。

(i) Just 6 hours old. That's the age of one participant in a recent study looking at ways to take the fingerprints of infants. (Aviva Rutkins. "Baby biometrics." *New Scientist*, 18 June 2016, p. 22)

(i) では、「わずか生後 6 時間」という名詞句により記事本文が開始され、直後に、それが「乳幼児の指紋を採取する方法を探るための調査における被験者の年齢」であることが明かされている。一個の名詞句が脈絡もなく提示されれば、読み手はそれが何を伝えたいものなのかを思考することになり、その解釈が保留されたまま、後続節を読み進めることになる。つまり、(i) のような事例は、本研究で取り扱った MLD に類する修辭的效果を持つ可能性がある。

なお、例示と総括の場合のMLDも、基本的には(22)と同じ機能的特徴を持つと考えられる。しかし、冒頭場面とは異なり、それらの場面では、先行文脈の情報も範疇化の手掛かりの一つとして活用できるため、列挙から想起される範疇名は唯一的に決まる。例えば、(13)の場合、文頭のPulsar等は、前文の「(電波天文学の発展に伴い、辞書に追加された)新しい用語」の具体例であるため、「新たに発見された天体」という範疇名を想起させる。(14)の場合、文頭のlove等は、前段落に提示された内容の総括であるため、「紹介された小説のテーマ」という範疇名を想起させる。したがって、例示と総括の場合、文頭の列挙にサスペンスの状態を発生させる働きはないと考えられる。

また、読み手の予測から少し飛躍した範疇名が後続節に明かされるという点で、3種類の使用場面におけるMLDは共通している。しかし、例示と総括の場合、その飛躍は先行文脈の情報により埋め合わせされる。例えば、上記(13)と(14)の後続節には、それぞれ「(近年)最も議論された対象」と「Purdyの著作に見られるテーマ」という予測から飛躍した範疇名が明示される。先行文脈の情報を踏まえれば、どちらの範疇名も自然に納得のゆくものとして読み手に受け入れられる。例示と総括の場合、読み手に納得のゆく範疇名が明かされることにより、以降の内容に関心を抱かせる効果が得られると考えられる。

## 6. おわりに

MLDは記事談話冒頭に使用できる。この事実はSLDを対象に提案されたLD機能的分析から導かれる予測に反している。本研究は、MLDを書き言葉および計画的な談話に特有の修辭的技巧として位置づけた上で、記事談話冒頭に使用される理由を考察した。MLDには、文頭に複数個の語句を列挙することにより、読み手に何らかの範疇名を考えさせた上で、後続節に書き手が意図した範疇名が明かされるという機能的特徴がある。先行文脈を伴わない環境に使用されると、文頭の列挙と後続節における意図の明示がそれぞれ、サスペンスの発生と解消の働きを担う。それにより、読み手の関心が以降の内容に引き付けられるという修辭的効果が発生する。そのため、サスペンスを発生させる文体がたびたび使用される記事談話冒頭に効果的に使用されるのである。今後の展望としては、いくつかの箇所で言及したことに加え、「話し言葉/書き言葉」および「無計画な発話/計画的な発話」といったジャンル上の分類をさらに明確にすることによりMLDの機能を分析することなどが考えられる。

## 参照文献

- Bally, C. 1909. *Traité de Stylistique Française*. Paris: Librairie C. Klincksieck.  
Barsalou, L. W. 1983. "Ad Hoc Categories." *Memory & Cognition* 11(3), 211-227.

- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Dienhart, J. M. 1998. "A Linguistic Look at Riddles." *Journal of Pragmatics* 31(1), 95-125.
- Fahnestock, J. 2011. *Rhetorical Style: The Uses of Language in Persuasion*. Oxford: Oxford University Press.
- Gundel, J. M. 1974. *The Role of Topic and Comment in Linguistic Theory*. Doctoral dissertation, The University of Texas at Austin.
- Hankamer, J. 1974. "On the Non-Cyclic Nature of WH-Clefting." *CLS* 10, 221-233.
- Hirschberg, J. B. 1985. *A Theory of Scalar Implicature*. Doctoral dissertation. University of Pennsylvania.
- Huddleston, R. D. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Iwasaki, S. 2015. "A Multiple-Grammar Model of Speakers' Linguistic Knowledge." *Cognitive Linguistics* 26(2), 161-200.
- Jefferson, G. 2004. "Glossary of Transcript Symbols with an Introduction." In G. H. Lerner (ed.) *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*, 13-23. Amsterdam: John Benjamins.
- Kantor, R. N. 1976. "Discourse Phenomena and Linguistic Theory." In A.M. Zwicky (ed.) *Working Papers in Linguistics* 21, 161-188. Ohio State University.
- Keenan, E. O. and B. Schieffelin. 1976. "Foregrounding Referents: A Reconsideration of Left Dislocation in Discourse." *BLS* 2, 240-257.
- Lambrecht, K. 2001. "Dislocation." In M. Haspelmath, E. König, W. Oesterreicher and W. Raible (eds.) *Language Typology and Language Universals* 2, 1050-1078. Berlin and New York: Walter de Gruyter.
- Mäzner, E. 1864. *Englische Grammatik* (Zweiter Theil: Die Lehre von der Wort- und Satzfügung. Erste Hälfte). Berlin: Weidmannsche Buchhandlung.
- Okuno, T. 1992. "Topicalization and Left Dislocation." *Bulletin of the Faculty of Education, Hirosaki University* 68, 1-8.
- Poutsma, H. 1904. *A Grammar of Late Modern English* (Part I The Sentence). Groningen: Noordhoff.
- Prince, E. F. 1997. "On the Functions of Left-Dislocation in English Discourse." In A. Kamio (ed.) *Directions in Functional Linguistics*, 117-143. Amsterdam: John Benjamins.
- Prince, E. F. 1998. "On the Limits of Syntax, with Reference to Left-Dislocation and Topicalization." In P. W. Culicover and L. McNally (eds.) *Syntax and Semantics 29: The Limits of Syntax*, 281-302. New York: Academic Press.
- Rodman, R. 1974. "On Left Dislocation." *Papers in Linguistics* 7, 437-466.
- Rosch, E. 1978. "Principles of Categorization." In E. Rosch and B. B. Lloyd (eds.) *Cognition and Categorization*, 27-48. Hillsdale: Erlbaum.
- Ross, J. R. 1967. *Constraints on Variables in Syntax*. Doctoral dissertation. Massachusetts Institute of Technology.

佐藤信夫・佐々木健一・松尾大. 2006. 『レトリック事典』東京：大修館書店.

Sperber, D. and D. Wilson. 1986/1995<sup>2</sup>. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.

Uchida, S. 1998. "Text and Relevance." In R. Carston and S. Uchida (eds.) *Relevance Theory: Applications and Implications*, 161-178. Amsterdam: John Benjamins.